

日本学
術会議

中国・四国地区ニュース

No. 44
2013. 3

発行
日本学術会議
中国・四国地区会議

記 事

学術会議地区活動について	1 頁
【寄稿】	
持続可能な社会のための金融の責任	3 頁
歯の再建と高齢化	7 頁
【公開学術講演会報告】	
今「宇宙」がおもしろい—宇宙と素粒子の連携—	10 頁
地区会議運営協議会新委員の紹介	13 頁
会員・連携会員一覧（中国・四国地区）	16 頁
地区会議事務局からのお知らせ	17 頁

学術会議地区活動について

日本学術会議中国・四国地区会議 代表幹事
第 3 部会員（香川高等専門学校 校長）

嘉門 雅史

第 22 期の日本学術会議の活動は、平成 23 年 10 月から平成 26 年 9 月までの 3 年間で予定しています。平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災と福島第 1 原子力発電所からの広範な放射能汚染事故を受けて、科学技術への国民の信頼が大きく揺らいでしまいましたが、日本学術会議では今期の大西 隆会長の強力なリーダーシップの下に、科学技術への信頼回復へ向けてこれまで以上に活発な活動を行っています。

日本学術会議では地域社会の学術の振興に寄与することを目的として、全国を7つのブロックに区分した地区会議を組織しています。当中国・四国地区では活動体制として広島大学を事務局として中国・四国地区運営協議会を設置しており、3名の会員と64名の連携会員で構成されています。運営協議会では日本学術会議の活動内容を地域の科学者等に周知することに努め、学術会議に対する意見・要望を積極的に取り上げていきたいと考えています。今期の事業計画は従来からの活動を踏襲して、年1回の地区ニュースの刊行と、公開学術講演会を開催することとしています。中国・四国地区の科学者と学術会議との意思疎通の向上に、決して十分なものではないと考えておりますので、地区の皆様からの活性化へ向けのご意見を賜ることができれば幸いです。

中国・四国地区の日本学術会議会員数は、他の地区と比較してきわめて少ないことが従来からの大きな課題であると認識しています。これについては前期からいろいろな提案をしてきた結果、22期の連携会員数が相当数増加したことについてはご承知の通りです。来期の会員数の増大に向けて、より一層のご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

平成24年度における地区会議の活動としては、平成24年12月8日(土)に広島国際会議場(広島市)で開催されました日本学術会議中国・四国地区会議学術講演会「今「宇宙」が面白い」—宇宙と粒子の連携—が挙げられます。観山正見先生を中心に企画実施した本講演会の詳細は本号の中で報告されていますが、宇宙、素粒子、生命分野での最前線の科学をわかりやすく解説することによって、一般市民にも興味深いものとなりました。担当いただいた関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成25年度の公開学術講演会はかがわ国際会議場(高松市)で、平成25年12月7日(土)に「大震災への備え(仮題)」と題して開催することとしています。南海トラフの連動による大地震や大津波の懸念が政府からも提示されていますが、一般市民を含めて事前防災の強化への議論をより一層進めたいと考えています。たくさんの皆様のご参加をお待ちしています。

今後の中国・四国地区における学術会議の事業へのご意見ご提案をお待ちしていますので、地区会議運営協議会委員の先生方や、事務局である広島大学学術・社会産学連携室 研究企画室まで是非お申し出ください。

皆様のご支援ご協力をお願い申し上げます。

持続可能な社会のための金融の責任

日本学術会議中国・四国地区会議 運営協議会委員
第一部会員（広島修道大学教授）

川本 明人

はじめに

日本および世界の経済状況は依然として多くの課題を抱えたままである。今日の経済の不安定性や下降の要因の一つは、アメリカに端を発した 2007 年のサブプライム・ローン（信用度の低い借り手への住宅融資）問題である。住宅バブルが崩壊して、2008 年秋にアメリカ大手投資銀行リーマン・ブラザーズがサブプライム関連で巨額の損失を出して倒産した後、多くの欧米主要金融機関が経営危機に陥った。

危機はその後、世界各国にリセッションを増幅させて世界経済危機をもたらした。EU ではギリシャ財政危機から欧州債務危機が深刻化し、共通通貨ユーロへの不安が一気に噴出した。日本やアメリカでもデフレ危機、財政危機が依然として問題となっており、ともに財政引き締めと税制改革が重要な課題となっている。同時に、通貨当局の金融政策や政府の雇用対策も引き続き緊急性を要し、また苦境脱出のための企業経営のイノベーションも大きな課題となっている。こうしたグローバルな課題に経済学や経営学が強力な知の集合体として応えていけるかどうか、まさに Science for Society としての社会科学のあり方が問われている。

ここでは、そうした世界経済の状況を念頭に置きながら、リーマンショック後の金融機関経営をめぐる話題として、金融リスクへの対応と責任、そして環境問題との関わりにふれてみよう。

1. 世界金融危機と金融規制

世界金融危機の最たる要因は、金融取引連鎖によるリスクの拡散と言えるが、危機をさらに広げたのはレバレッジ（てこ）手法を用いたマネーの膨張、金融肥大化現象である。金融の暴走、カジノ資本主義、グリード（強欲）金融至上主義と批判もされたように、マネー取引が経済の前面に出てきたことが危機と大きく関係していた。そして、取引当事者さえ、リスクの実態が見えなくなってしまったところに大きな問題点があった。

金融機関間でリスクがどのように積み上げられ移転・伝播していったのかについては、各国政府・通貨当局や当事者金融機関等において実証分析や研究が蓄積されてき

ている。あわせてリスク管理の見直しという観点から、金融規制を強化する動きが目立っている。これらは銀行自己資本の質の向上およびリスク管理の強化を目指した「バーゼルⅢ」とよばれる指針や、IOSCO（証券監督者国際機構）、IAIS（保険監督者国際機構）などによる規制・監督強化方針として結実してきた。こうした通貨当局や監督機関からの新たな金融規制の枠組みの中で、個々の金融機関はこれまでにない経営上、取引上の対応を迫られている。

金融機関は本来リスクを受容しながら貸借や投融資取引といったビジネスを展開する事業体である。したがって金融機関は信用リスク、流動性リスク、市場リスクといった特有のリスクを保有する。これらに、営業上のオペレーショナルリスクや決済破綻のリスク、企業経営上のリスクなどが加わり、多様なリスクへの対応が必要となっている。さらに、業務の多様化とグローバル展開を進めるグローバル金融機関に対しては、いっそう厳しいリスク管理や独自の規制も議論されている。まさに、世界金融危機を機に金融リスクマネジメント論の対象が大きく広がっている。

2. 金融の社会的責任

金融は、様々な取引主体が複雑に絡みながら市場システムを構成する。したがって、金融にまつわるリスクとしても、前述のリスクに加えて、銀行に固有な決済システムの連鎖的破綻というシステムリスクに大きな注意が払われてきた。今日ではさらに広義に、金融機関が投融資先である企業活動の社会的意義や社会のさまざまな問題にも配慮しないと、金融機関を含め社会・経済が大きな痛手を被るという意味でのシステムリスクが顕現する可能性が大きいという認識も急速に広まっている。

金融取引におけるリスクの発現が社会に大きく広がり、金融部面のみならず社会のあらゆる面に影響を及ぼしていくという文脈でのリスクを、筆者は「ソーシャルリスク」ととらえている。そして、ソーシャルリスクの一つに、社会の持続的発展を妨げるリスクである「サステナビリティ・リスク」がある。すなわち、サステナビリティ・リスクは、経済活動を含む広く人間社会の持続性が保たれなくなるようなリスクであり、地球温暖化問題など環境事象が代表的なものとして想起されるが、ここではもう少し広範囲な概念とする。サステナビリティに関するリスクが高まれば事業会社は相当の対応策を余儀なくされ、金融機関も含めてコストが大きく増加することになる。また、金融機関による投融資が社会にダメージを与えサステナビリティを破壊すると認定された場合には、金融機関の法的責任を問われることにもなる。

一方で、世界金融危機は、あらためて金融機関や投資家に金融の社会的責任を再認識させている。金融機関は経済を円滑に動かし豊かにするための資金管理を担う社会の公器としての役割を有しているはずである。そうした意味で、金融の現代的あり方と

して多様な活動形態を取る金融機関が一層注目されてきている。

欧米のいくつかの国で先行事例があるが、たとえば地球環境や地域貢献に配慮しながら社会的責任を活動原理に掲げているソーシャルバンクの例がある。その一つ、オランダのトリオドス銀行などは、金融危機にもかかわらず、社会的責任融資の取り組みが評価され、結果的に利益を拡大した。また、バングラディッシュのグラミン銀行で知られるマイクロファイナンスも、少額融資が果たす意義を再認識させるものとして貧困撲滅など大きな役割を各地で発揮してきている。

3. 持続可能性と金融

近年、地球環境の持続性を保つ経済開発（サステイナブル・ディベロップメント）や、それを意識した金融（サステイナブル・ファイナンス）、さらには環境（Environment）、社会（Social）、コーポレート・ガバナンス（Corporate Governance）という ESG 要因に配慮した責任投資（RI）といった考え方がグローバルなレベルで急速に普及し定着しつつある。

「サステイナブル・ディベロップメント」という概念は、1992 年 6 月の「環境と開発に関する国連会議」における「リオデジャネイロ宣言」により明確にされた。そして、持続可能な開発のための地球環境の維持方策の一つとして、環境に配慮した投融資の促進、あるいは環境リスク評価などを柱とする金融の役割が注目されるようになった。2012 年 6 月にはフォローアップ会議として「国連持続可能な開発会議」（「リオ +20」）が開催され、貧困削減、社会的公正、環境保護を柱としたグリーン経済などが議論された。

並行して 1992 年には、「環境および持続可能な発展に関する銀行声明」が民間銀行等によって起草され、同年 5 月には「国連環境計画・金融イニシアティブ（UNEP FI）」が国連・金融機関のパートナーシップとして設立された。現在、200 以上の世界各国の銀行、証券会社、保険会社等が UNEP FI に署名し、さまざまな環境問題を中心とした持続可能性の取り組みを展開している。UNEP FI とともに、「国連グローバル・コンパクト」（GC）もサステイナブル・ファイナンスをリードしている。GC は UNEP FI と共同して、2006 年に 6 項目からなる「責任投資原則」（PRI）を定めた。

民間金融機関の自主的なガイドラインとしては、途上国等へのプロジェクトファイナンスを行う際に環境や社会的リスクを評価する「赤道原則（The Equator Principles）」が知られている。これは 2003 年に民間金融機関 10 行によって策定され、2013 年 1 月現在で 78 の金融機関が採択している。それら金融機関がプロジェクトファイナンスを行う場合に、対象となる現地国環境法等の遵守や、環境、地域住民の人権保護等を定めた国際金融公社（IFC）の Performance Standards 等に沿うことが申し合わされている。

る。すでに赤道原則は「国際的な環境、社会評価のベンチマーク」の一つになっている。

環境への問題意識や環境ビジネスへの関心が高まる中、社会的責任投資を前面に出したファンド（SRI ファンド）やエコ・ファンドの開発・販売も増加してきている。アメリカの SIF（Social Investment Forum）がまとめた報告書では、SRI ファンドへの投資も含め ESG を考慮した責任投資が大きく拡大しており、2012 年には全体で 3 兆 7400 億ドルとなっている。ヨーロッパも含めて SRI の額は長期的に増加していく傾向にある。

4. Future Earth との関わり

上で見た責任投資は、基本的には環境破壊リスクを軽減するためのリスクコントロール手段である。ESG 要因を配慮することで、投資の結果生じうる環境負荷をできるだけ減らし、環境保全を意識しながら持続可能な社会を維持することを主眼とする。気候変動やそれにとまなう干ばつ、洪水といったハザードを回避し、また生物多様性を損なったりするような経済活動を抑制・転換することがリスクコントロールの基本にある。

こうした「環境金融」として括られるようになった金融の環境保全に対する役割と責任は、金融活動を制約する付加的な業務ではなく、環境や社会のリスクを軽減し、それによってビジネス機会と収益性を維持・拡大するものである。金融機関が積極的に環境や社会に配慮した投融資をしていくことでグローバル世界の健全性、安定性を高め、ソーシャルリスクへの対応として、投融資先に環境配慮行動とサステイナビリティ意識を浸透させていくことも必要である。現在、科学者の間で国際的な研究プロジェクトとして進められつつある Future Earth への金融分野における重要な課題の一つと言える。

金融のグローバル化が進み、各国経済や金融市場が一段とつながりを強める状況下で、とりわけ金融に求められるのは、国家を超えたトランスボーダーな相互の協力と連帯である。世界金融危機の原因を作ったのは金融暴走であったが、当事者として指弾された欧米の金融機関や機関投資家によって、サステイナブル・ファイナンス促進のための取り組みが拡大してきているのも事実である。グローバルに活動する金融機関に対しては、リーディング機関として持続的発展を意識した行動が一段と求められる。

歯の再建と高齢化

日本学術会議中国・四国地区会議 運営協議会委員

(徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 教授)

(口腔顎顔面補綴学分野)

市川 哲雄

歯科補綴とは

私の領域は歯科補綴学という分野です。歯科領域の用語は、非常に難解で一般的でないものが多いようです。「補綴」などはその最たるもので、今では歌舞伎や文楽の台本や演目に、演出者、出演者と同じように「補綴」担当者として出てくるぐらいなものです。ここでの「補綴」は、古典歌舞伎の脚本を現代に甦らせる作業をいうのですが、歯科補綴の場合には、歯や歯質の欠損を「補って綴って」、口腔の機能と形態を回復・維持する治療およびその学問をいいます。

オッセオインテグレーションとインプラントによる歯の再建

歯の欠損に対する再建方法は、今まではブリッジと義歯でしたが、最近ではインプラントがいい意味でも悪い意味でも注目されています。これはチタン製の人工歯根(インプラント体)を顎骨の中に埋入し、上部構造と呼ばれる歯冠部をその上に固定して機能回復する方法をいいます。

実は、人工物を顎骨に埋入すること自体は、材料を義歯のような複雑な形態に加工することよりも簡単であるため、古代の遺跡からインプラントをした骸骨が出土することが報告されています(Nature, 1997 など)。近代になって、様々な材料がインプラント材として試用されました。しかし、基礎研究—トランスレーショナルリサーチ—臨床試験というレギュラトリーサイエンスが十分でなかったこともあり、まずヒトに埋めてみようというものでことごとく失敗に至っていました。

現在のインプラントシステムは 1960 年頃、スウェーデンのイエテボリ大学の解剖学者であったブローネマルク教授が骨髄の研究の最中に、偶然チタンと骨がよく結合することを発見したところから始まります。この結合を医療に応用できないかということで人工歯根への応用研究が始まったわけです。生物学的、理工学的な研究を十分に行ったあと、下顎の無歯顎の前歯部に数本のインプラントを埋入し、これを橋脚部として噛む部分とつなげるという治療法でした。

ブローネマルク教授らは当初、光学顕微鏡での所見から純チタンと骨組織は結合す

ると考え、臨床応用に踏み切ったと思われます。この結合に対してオッセオインテグレーション (Osseointegration、Osseo : 骨の + Integration : 統合、一体化) という造語を作りました。必ずしも分子レベルで結合しているというデータは得られませんでした。臨床応用の方は順調に進み、日本にはこの臨床システムが 1980 年代の前半に導入されました。

同時期にハイドロキシアパタイト (HAP) の人工合成が日本で成功し、この材料を用いたインプラントシステムが開発され、我々の教室ではこのインプラントを導入しました。電子顕微鏡下で観察される HAP から骨への結晶格子の連続性、動物実験における組織学的所見での HAP と骨との界面は、チタンに比べてすばらしく、臨床応用も順調に進みました。しかし、ある時点から脱離、破折が続きました。脱離したインプラント表面を観察すると、多核巨細胞様細胞が観察され、HAP を吸収している像が得られました。インプラント周囲の 3 次元骨構造解析システムを開発し、純チタン、HAP、純チタン表面にカルシウムイオンを注入した材料を動物に埋入しその周囲骨構造を比較しました。純チタンは経時的に骨組織がゆっくり増加し、HAP は急激に増加、その後減少に反転し、純チタン表面にカルシウムイオンを注入した材料はその中間的な様相を示しました。チタンという金属材料の安定性と、結合ではなく骨によるチタン周囲の被包という生体反応で、結果としてチタンインプランが良好な結果が得られたと推定されました。

現在、我々の領域では骨を創ることと、オッセオインテグレーションを促進するチタンの表面性状の改質法に関する研究が多方面で進められています。旧来のチタンインプラントでも臨床成績は非常によく、5 年生存率で 95% 以上になっています。そして、インプラント埋入からオッセオインテグレーションを獲得するための安静期間を経て上部構造装着まで約 6 ヶ月間の治療期間がかかっていたものが、我々の方法も含め 48 時間以内に終了するシステムが開発され、これも高い成功率を維持しております。

超高齢社会における歯の保存と再建の功罪

一方、日本の高齢化が急速に進み、2008 年には 65 歳以上の高齢者の割合が 22% を越え、超高齢社会に至っています。インプラント治療も当初は 10 年程度の生存ということを目標に行われてきたと思いますが、寿命の延長で 20 年、30 年という経過と、様々な疾患、障害が生じることを想定してインプラント治療という臨床決断が求められるようになっていきます。たとえば、骨粗鬆症の治療薬であるビスフォスフォネートの副作用に重篤な顎骨壊死があります。今はこれを服用している患者のインプラント治療ができるかどうかの問題となっておりますが、今後は何十年後の服用のリスクをどう予測、評価して、インプラント治療を行うかという問題がクローズアップされてく

ると思います。

要介護状態になった場合には歯の保存やインプラントが、治療の煩雑さ、口腔の疼痛、炎症、感染症、そして誤嚥性肺炎や代謝性疾患、心血管系疾患を惹起しやすい状態を引き起こし、医療、介護の現場で大きな問題になることが危惧されます。一方、旧来の全部床義歯を有する無歯顎者は口腔衛生状態を保ちやすく、口腔管理がしやすい環境になります。我々の領域は、歯の保存、より快適な歯の再建という目標をもって歩んできたわけですが、高齢期をどう見据えて歯の保存、再建をすべきかという問題も考えなければいけません。

創り、支える口腔科学 —持続可能な健康長寿社会のために—

歯学というのは、歯自体が中胚葉組織から外胚葉組織を貫く唯一の器官であるように、微生物、人工材料、組織、力、感覚という多彩な環境を対象とする学問と考えております。歯科補綴学はその多彩な環境を歯科の中で最も反映している分野です。歯の再建、補綴の一義的な目的である咀嚼機能の回復にしても、食物の粉碎、混合能力だけでなく、嚥下の準備期としての咀嚼、噛み心地、味わい、消化促進など多方面の咀嚼の意義を考え、臨床、研究を進めていかなければなりません。

高齢化の問題は、学会会議のなかでも「持続可能な長寿社会に資する学術コミュニティの構築委員会」が設置されたように、多くの領域、職種が各ライフステージの中で連携し、取り組んでいかなければ解決しません。

私の属する徳島大学歯学部、口腔科学教育部も「創り、支える口腔科学 —持続可能な健康長寿社会のために—」という標語のもとに、口腔の観点から高齢期をどう生き抜くかという問題に取り組んでいます。

公開学術講演会報告 今「宇宙」がおもしろい —宇宙と素粒子の連携—

日本学術会議中国・四国地区会議 運営協議会委員
第 3 部会員（広島大学特任教授）

観山 正見

平成 24 年度は、広島大学が日本学術会議中国・四国地区会議のお世話をする事となり、広島で表題の学術講演会を開催しました。主催者の狙いは、現代の物理学の最先端では、宇宙物理学・天文学と言ったマクロな世界の物理と、素粒子と言ったミクロの世界の物理学が、密接に絡んで新しい物理学の誕生に進みつつある現状を、多くの方々に知っていただきたいことでした。学術の将来像の一端を直接感じていただければと考えた次第です。

講演会は、平成 24 年 12 月 8 日、広島国際会議場で、200 人にも上る熱心な聴衆が参加して開催されました。特に、期末試験間近にも係わらず、意外に多くの高校生や大学生の参加も見られ、若い人たちの最先端の科学への興味の強さが伺えました。この点は、主催者として大きな喜びでした。

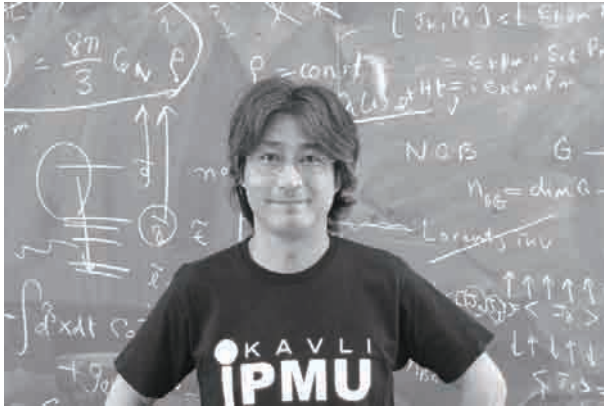
まず、主催者を代表して浅原利正広島大学学長の挨拶があり、引き続き、大西隆日本学術会議会長からの挨拶がありました。特に、大西会長からは、現在の日本学術会議の状況、今後の我が国の学術活動の推進への期待、また、専門の都市工学の観点からの展望など貴重なお話をいただきました。



講演中の筆者

その後学術講演会に入りました。最初の講演者は、著者で、「私たちが宇宙のつながり」という題で、後の三名の講演者の前座を務めました。我が国の天文学の現状を、すばる望遠鏡の成果や南米チリに建設が進んでいるアルマ望遠鏡の現状を紹介することで示し、宇宙探求ソフトである国立天文台提供の「MITAKA」を使って、137 億光年の宇宙の広がりを一

望しました。そして、宇宙の歴史から考えると、地球や私たちの存在は、宇宙の営みとつながっていることを説明しました。すなわち、私たちが構成している様々な元素は、実は、地球が生まれるまでの約 90 億年間に、様々な星の内部での元素生成活動の結果であって、「私たちは星の灰からうまれた」わけでありませう。



村山 斉 教授

次の講演者の村山斉教授（東京大学カブリ数物連携宇宙研究機構長）は、多くの親しみやすい著書の執筆や、テレビ出演などで著名な研究者で、最先端の素粒子物理学者です。先生のタイトルは、著書の題名でもある「宇宙はどうしてこんなにうまくできているのか」が講演題目でした。村山先生は、「宇宙や素粒子と言った難しそうな科学も、実は身近な現象

の中に、そのわけを探っていくと、しっかり関係している」というわかりやすい話から始まりました。村山先生の軽妙でかつ情熱あふれる話し方に、聴衆は引き込まれていきました。今、宇宙の大きな謎である暗黒物質、また、最近見つかったヒッグス粒子の話をつかり易く説明され、そして、宇宙の歴史、物理学や宇宙物理学から考えて、宇宙がいかにか人間の存在するため都合よくできているのかを指摘されました。特に聴衆の中の若い方々は、今後の素粒子や宇宙論の発展の可能性について、強く印象づけられたのではないかと思います。

佐藤勝彦教授（自然科学研究機構長）の講演題目は「宇宙の創成とマルチバースー宇宙は無限に存在するのか？」でした。佐藤勝彦先生も、テレビや数々の著書で有名な先生です。自然科学研究機構は、国立天文台、核融合科学研究所、基礎生物学研究所、生理学研究所、分子科学研究所を束ねる研究機関です。先生は、宇宙誕生の最初に、宇宙が指数関数的に膨張する「インフレーション宇宙」の存在の最初の提唱者です。通常のビッグバン宇宙だけでは、説明できない重要な問題を、インフレーション宇宙モデル



佐藤勝彦 教授

を考えると解決できることと、一方、その理論に依れば多数の宇宙（マルチバース）が生まれることが帰着されることを示されました。そして、宇宙論の根源的問題は、あたかも「この宇宙（物理法則）は、あたかも人間を生み出すようにうまくデザインされている」ことでしか説明できないように見えることを丁寧に示されました。例えば、「空間の次元」、「物理的力の強さ」、「核子の重さ」など、どれもほんの少しだけ違っても、人類の存在はなかったことを示され、それらは奇跡に近いと表現されました。つまり、あたかも宇宙や物理法則は、人間が存在するためにようにアレンジされている「人間原理」に行き着くのだとことを示されました。このお話には、多くの聴衆が引き込まれたと思います。

最後の講演者は広島大学教授深澤泰司さんです。「X線ガンマ線観測で探る激動宇宙」の題名で、講演をいただきました。宇宙からくる光（可視光や赤外線）は、すばる望遠鏡のような望遠鏡で捉えます。一方、宇宙の様々な天体からは電波も放出されていて、これは電波望遠鏡で受けます。ところが、これ以外にも、エネルギーの高い電磁波であるX線やガンマ線を放出する天体もあり、これらは宇宙望遠鏡で観測します。深澤先生は、このような高エネルギー天文学の若手のホープ的な研究者です。これら高エネルギーの光を観測することで、見えない謎の物質「暗黒物質」の存在分布がいかにかかわるのかとか、宇宙の最大の爆発ガンマ線バーストの話など、分かり易く説明いただきました。そして、広島大



講演中の深澤泰司教授

学の宇宙研究グループが、世界最先端の観測機器の開発をしていることや、高エネルギー天文と東広島天文台（かなた望遠鏡）による観測の連携によって、数々の成果を出していることの紹介がありました。高校生や学部学生にとって、自分たちの進路を決める上で参考になる話ではなかったかと思えます。

講演が終了した後は、若い学生達が講演者を取り囲んで熱心に質問する姿も見られ、彼や彼女達には、大変よい機会になったのではないかと主催者として喜んでいます。

最後は、日本学術会議地区会議運営協議会代表幹事の嘉門雅史（香川高等専門学校長）から、閉会の挨拶があり、来期の講演会は香川県で行うことの披露がありました。その後、講演者・関係者の懇親会があり、大西会長も出席いただいて、講演者と懇談に参加いただきました。今回の学術講演会は、多くの参加者、特に、若い高校生や大学生の参加も見られ、当初の期待以上に皆さんに喜んでいただけたと思います。これらは、ひとえに地区会議運営協議会の皆様のご支援のおかげであり、広島大学をはじめとする関係者の努力のためのものであるとこの紙面を借りてお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

地区会議運営協議会新委員の紹介

このたび地区会議運営協議会委員の交替がありましたので新委員をご紹介します



氏 名 (ふりがな) : 観山 正見 (みやま しょうけん)

専 門 : 物理学

所 属・職名 : 広島大学 特任教授

平成 24 年 4 月より、前職国立天文台長の任期満了につき、学長室特任教授として広島大学に赴任しました。また、日本学術会議会員であるため、事情がよくわからないまま、日本学術会議中国・四国地区会議運営協議会の委員を仰せつかりました。どうぞ宜しく御願いたします。

専門は、理論天文学であり、主として恒星や惑星系の形成過程を研究してきましたが、近年は、管理職としての活動が忙しく、研究の方は遅々として進んでおりません。これからがんばりたいと思っております。実家は、広島大学のある東広島市の片田舎にあり、大学には自家用車で通っています。広島大学では、研究面で関連ある宇宙科学センターに併任させていただいており、東広島天文台のお手伝いもさせていただいております。

微力ですが、中国・四国地区の日本学術会議の活動が活発になるようお世話させていただきたいと思っております。どうぞよろしく御願いたします。



氏 名 (ふりがな) : 矢部 敏昭 (やべ としあき)

専 門 : 心理学・教育学

所 属・職名 : 鳥取大学副学長

第 22 期より日本学術会議連携会員になりました。専門は数学教育学です。2 年前まで鳥取大学地域学部長をしていたことより、地域研究委員会分科会 (地域学分科会) にも所属させていただいております。また、平成 24 年 4 月 1 日からは中国・四国地区会議運営協議会委員を努めさせていただいております。

毎月送られてくる日本学術会議の刊行物は、自分自身の視野を広げる貴重な読み物として、また、学術とは何か、を自身に問う機会となっております。日本学術会議の使命を認識しつつ、地方における学術会議の役割を考えていけたらと思っております。よろしくお願ひ申し上げます。



氏 名 (ふりがな) : 小林 祥泰 (こばやし しょうたい)

専 門 : 臨床医学

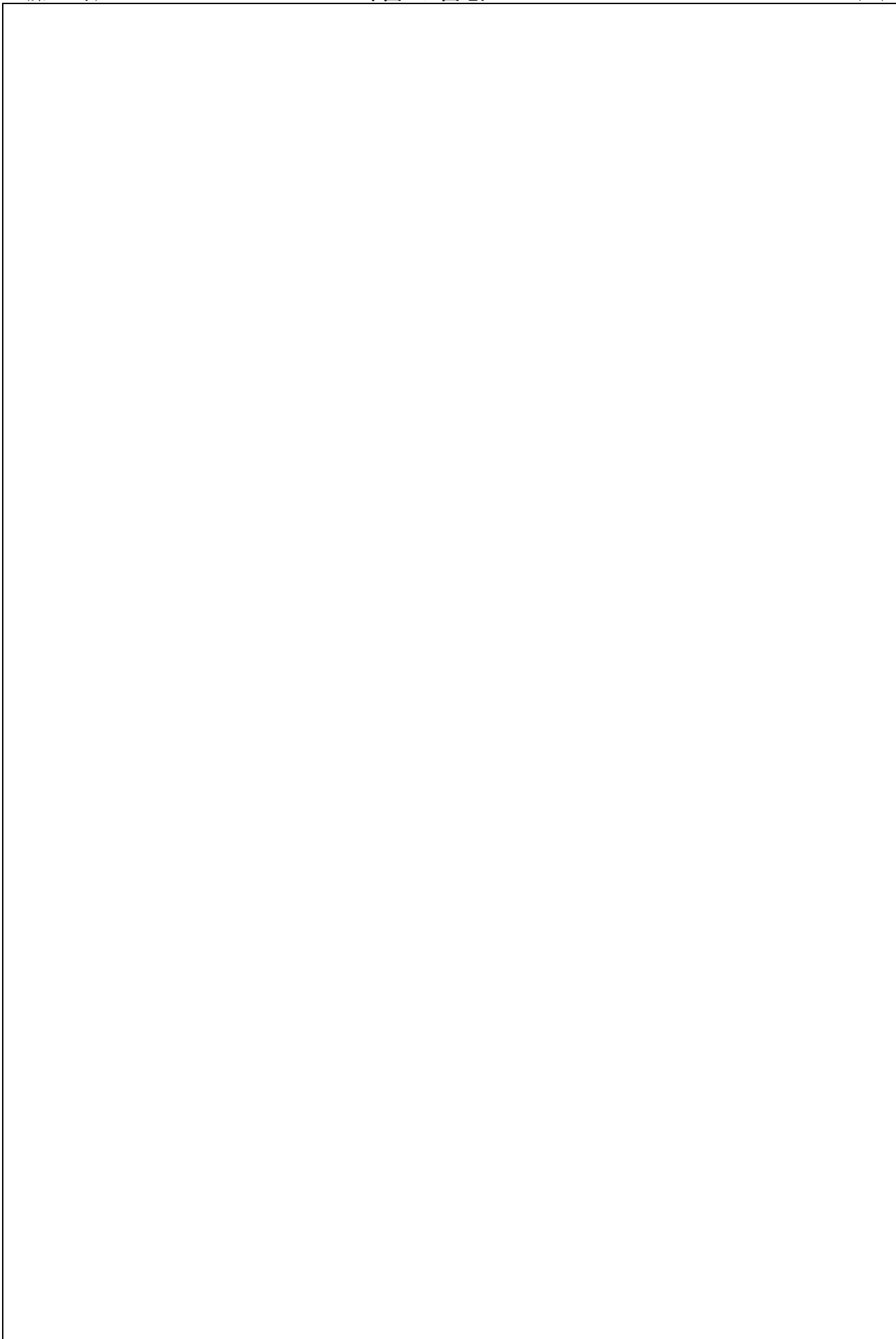
所 属・職名 : 島根大学長

医師の専門職自律に関する分科会に連携会員として属しています。専門は神経内科ですが内科専門医の草分けでもあり、日本内科学会専門医制度審議会長を務めていました。

7 年間島根大学病院長として病院再開発、地域医療人養成に当たってきました。昨年からは米国内科学会日本支部長を元日本学術会議会長の黒川清初代支部長の後を受けて務めています。

全国医学部長病院長会議で卒後臨床研修調整委員会委員などを長く務めて、今の知識偏重の医師国家試験の全面的改訂と連携させた卒後研修臨床研修の改善を訴えてきました。ようやく文科省と厚労省の合同協議も始まっていますがまだ道は遠いようです。米国のように卒業したらすぐに実戦対応可能な医師を育てると同時に、臨床からテーマを得る研究マインドを養成する戦略が必要と思います。

学術会議にはあまり縁のなかった私ですが、大学改革で COC が強調される中で、地方における学術振興のために日本学術会議中四国地区協議会は大変重要であるという思いを新たにいたしました。よろしくお願ひ致します。



第 22 期会員・連携会員一覧 (中国・四国地区)

【鳥取県】

辻本 壽 (農学) 鳥取大学乾燥地研究センター教授
矢部 敏昭 (心理学・教育学) 鳥取大学副学長
山下 博樹 (地域研究) 鳥取大学地域学部准教授

【島根県】

小林 祥泰 (臨床医学) 島根大学長
陶山 容子 (材料工学) 島根大学教授
宮崎 康二 (臨床医学) 島根大学医学部産科婦人科教授

【岡山県】

有本 章 (心理学・教育学) くらしき作陽大学
作陽音楽短期大学学長
内富 庸介 (臨床医学) 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科
精神神経病態学教室教授
小川 容子 (心理学・教育学) 岡山大学大学院教育学研究科教授
唐木 英明 (農学) 倉敷芸術科学大学学長
公文 裕巳 (臨床医学) 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科
泌尿器病態学分野教授
齋藤 清機 (化学) 放送大学岡山学習センター所長
笹尾 真実子 (物理学) 東北大学大学院名誉教授
同志社大学研究開発推進機構嘱託研究員
實成 文彦 (健康・生活科学) 山陽学園大学副学長
山陽学園短期大学副学長
白石 友紀 (農学) 岡山大学大学院自然科学研究科教授
滝川 正春 (歯学) 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科教授
武田 和義 (農学) 岡山大学名誉教授
西垣 誠 (土木工学・建築学) 岡山大学大学院環境学研究科教授
二宮 善文 (基礎医学) 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科教授

【広島県】

相田 美砂子 (化学) 広島大学大学院理学研究科教授
秋野 成人 (法学) 広島大学大学院法務研究科教授
太田 茂 (薬学) 広島大学大学院医歯薬保健学研究院教授
岡本 祐子 (心理学・教育学) 広島大学大学院教育学研究科教授
奥村 晃史 (地球惑星科学) 広島大学文学研究科教授
越智 光夫 (臨床医学) 広島大学大学院医歯薬保健学研究院教授
整形外科教授
神谷 研二 (基礎医学) 広島大学原爆放射線医科学研究所長・教授
○川本 明人 (経営学) 広島修道大学商学部教授
坂田 桐子 (心理学・教育学) 広島大学大学院総合科学研究科教授
住居 広士 (社会学) 県立広島大学大学院教授
(保健福祉学専攻)
高田 隆 (歯学) 広島大学大学院医歯薬保健学研究院教授
内匠 透 (基礎医学) 広島大学大学院医歯薬保健学研究院教授
谷口 雅樹 (物理学) 広島大学大学院理学研究科教授
放射光科学研究センター長
土屋 英子 (農学) 広島大学理事・副学長(研究担当)
大学院先端物質科学研究科教授
利島 保 (心理学・教育学) 広島大学名誉教授
中坪 史典 (心理学・教育学) 広島大学大学院教育学研究科准教授
平野 敏彦 (法学) 広島大学大学院法務研究科教授
前川 功一 (経済学) 広島経済大学学長
三浦 道子 (電気電子工学) 広島大学大学院先端物質科学研究科教授
○観山 正見 (物理学) 広島大学特任教授
山本 陽介 (化学) 広島大学大学院理学研究科教授
山脇 成人 (臨床医学) 広島大学大学院医歯薬保健学研究院教授

【山口県】

加藤 紘 (臨床医学) 山口大学名誉教授
田中 和広 (地球惑星科学) 山口大学大学院理工学研究科教授
土生 英里 (経営学) 山口大学経済学研究科准教授
早川 誠而 (農学) 宇部市公園整備局緑と花と彫刻の
博物館「ときわミュージアム」企画監
山口大学名誉教授
三浦 典子 (社会学) 山口大学名誉教授

【徳島県】

市川 哲雄 (歯学) 徳島大学大学院教授
佐々木 宏子 (心理学・教育学) 鳴門教育大学名誉教授
高濱 洋介 (基礎医学) 徳島大学疾患ゲノム研究センター長・教授
姫野 誠一郎 (薬学) 徳島文理大学薬学部教授

【香川県】

一井 眞比古 (農学) 香川大学名誉教授
○嘉門 雅史 (土木工学・建築学) 香川高等専門学校校長
神江 伸介 (政治学) 香川大学法学部教授

【愛媛県】

橘 燦郎 (食料科学) 愛媛大学農学部教授
田邊 信介 (環境学) 愛媛大学沿岸環境科学研究センター教授
長濱 嘉孝 (基礎生物学) 愛媛大学社会連携推進機構南予水産
研究センター教授
野並 浩 (農学) 愛媛大学農学部教授
三木 哲郎 (臨床医学) 愛媛大学教授
山内 皓平 (農学) 愛媛大学社会連携推進機構教授
南予水産研究センター長

【高知県】

飯國 芳明 (農学) 高知大学教育研究部教授
岩田 誠 (情報学) 高知工科大学情報学群教授
宇高 恵子 (基礎医学) 高知大学医学部教授
國島 正彦 (総合工学) 高知工科大学システム工学群
社会システム工学教室教授
西郷 和彦 (化学) 高知工科大学副学長
佐久間 健人 (材料工学) 高知工科大学副理事長・学長
曾根 三郎 (臨床医学) JA 高知病院院長, 徳島大学名誉教授
野嶋 佐由美 (健康・生活科学) 高知女子大学看護学部長
南 裕子 (健康・生活科学) 高知県立大学学長

※○印は会員

※一部の連携会員の専門分野及び現職名は選考時(平成 23 年 10 月)のものです。

地区会議事務局からのお知らせ

1 平成 24 年度日本学術会議中国・四国地区会議事業報告

事業名・期日（時期）・場所等	事業内容
第1回地区会議運営協議会 平成 24 年 7 月 9 日(月) 広島大学歯学部中会議室（広島）	【協議事項】 ①平成 24 年度事業計画(案)について ②平成 25 年度学術講演会について ③運営協議会委員の交代について
第 2 回地区会議運営協議会 平成 24 年 10 月 26 日(金) (メール審議)	【協議事項】 ①運営協議会委員の交代について
第 3 回地区会議運営協議会 平成 24 年 12 月 8 日(土) 広島国際会議場（広島市）	【協議事項】 ①平成 24 年度事業計画(案)について ②平成 25 年度学術講演会について
第 1 回公開学術講演会 平成 24 年 12 月 8 日(土) 広島国際会議場（広島市）	【テーマ】 『今「宇宙」がおもしろいー宇宙と素粒子の連携ー』 【講演】 「私たちと宇宙のつながり」 広島大学特任教授 観山正見 「宇宙はどうしてこんなにうまくできているのか」 東京大学カブリ数物連携宇宙研究機構長 村山 斉 「宇宙の創生とマルチバース」 ー宇宙は無限に存在するのか？ー 自然科学研究機構長 佐藤勝彦 「X線ガンマ線観測でさぐる激動宇宙」 広島大学教授 深澤泰司
第 4 回地区会議運営協議会 平成 25 年 3 月 25 日(月) (メール審議)	【協議事項】 ①平成 25 年度事業計画について
地区ニュース発行	中国・四国地区の日本学術会議会員・連携会員及び教育研究機関等へ 配布


2 平成 25 年度公開学術講演会について

日 時：平成 25 年 12 月 7 日（土）

場 所：かがわ国際会議場（高松市）

テーマ：「大震災への備え」（仮題）

※ 詳細等が決定致しましたら改めてご案内させていただきます。


原稿募集

地区ニュースは科学者の方々と日本学術会議中国・四国地区会議との連繫を図ることを主な目的としております。

日本学術会議あるいは教育，研究，学術等に関する率直なご意見，ご希望等をお寄せくださいますようお願い致します。

お願い

回覧等により，多くの方々に読んで頂きますよう，ご配慮願います。

日本学術会議中国・四国地区会議事務局
〒739-8511 東広島市鏡山一丁目3番2号
(広島大学学術・社会産学連携室 研究企画室内)
TEL：082-424-4336 FAX：082-424-6990
E-mail：gakujutu-kikaku@office.hiroshima-u.ac.jp

